デュラン、ステファン・アイソル

授業

本年度、前期と後期、「日本仏教音楽史」をテーマにして「日本伝統音楽演習」を担当させて頂いた。前期の授業では、世界音楽史における日本の仏教音楽の役割・重要性を把握するため、まずはアジア大陸における仏教音楽の展開について講義をした。特に、仏典における仏教声楽・器楽・舞踊などの出現について学び、漢文資料から読み解く隋時代・唐時代の音楽理論とインド音楽理論との関係についても学習した。その後、渡来音楽理論の日本化とその広まりについて勉強し、湛智の「声明用心集」から、真言声明の様々な口伝書の歴史と内容について学んだ。その中で、覚意（1264～？）の「博士指口伝事」と五音博士の読解法を学び、五音博士の実践として曲の記譜に挑戦した。

そして、後期では、世界音楽史における日本の仏教系語り物の役割・重要性を理解するため、まずは言語と旋律の関係、特に古代音楽におけるアクセントの役割を勉強した。そこから初期仏教声楽におけるアクセントの役割を研究し、中国における唱導とその広まり、日本における唱導など、それらの初期日本仏教声楽への影響を学んで行き、民衆の音楽への影響も、把握することを目指した。最後に、琵琶法師の誕生について学び、楽琵琶から平家琵琶、近代琵琶までの影響を研究し、各ジャンルの音楽構造・旋律型の分析を和文声明との関連で取り組んだ。

前期と後期で行った授業では、受講者によるプレゼン発表と授業で行う課題によって成績を付けた。特に、プレゼン発表では、解決すべき課題を自ら創出し、自律的にその解決への道筋を整えているかどうかが成績を決め、授業で行う課題においては、授業で学んだ音楽的概念等の理解が十分であるかどうかによって評価した。

研究

本年度から開始した研究の科学研究費助成事業上での題目は「真言声明から読み解くヨーガの音」となっているのだが、その研究の目的は、日本の「梵讃」の研究の国際化であり、世界音楽史の視野をより広げるために、「梵讃」の旋律と古代インドの音楽理論との間の関係を明らかにすることである。日本語・中国語の仏教文献とサンスクリット語の文献の中に現れる音階・旋律型・装飾音・発声法などに関する記述を比較分析し、元のサンスクリット語の用語・概念を解明した上で、これらが「梵讃」の形成にどのような影響を及ぼしたのかを分析する。そこで、「梵讃」と同じ系統を持つネパール仏教のチャチャー修行歌（Cacā）の曲群の収集、採譜、音楽的分析、さらにその前提となる古代インドの音楽理論を突き止め、「梵讃」との比較分析を行う。

前期では、真言声明の最古の口伝書、覚意の『博士指口伝事』の英訳に加えて、Nāṭyaśāstra”と“Dattilam などの古代インド音楽理論書から読む音階理論を、『律曆志』、『隋書』等の中国の文献に現れる音楽理論と、藤原貞敏（807-867）の『琵琶譜』、天台宗の僧侶安然（841 年－ 915 年？）の『悉曇蔵』、後白河天皇（1127 年－ 1192 年）の『梁塵秘抄口伝集』、天台宗の僧侶湛智（1163-1237）の『声明用心集』の中に現れる日本の声明・雅楽の音階理論を中心に比較研究し、その結果インドの音階理論の痕跡が声明・雅楽の音階理論に残されていることが分かった。日本に伝えられた可能性のあるインドの音階的概念等には、grāma（二つの基本的音階）、sādhāraṇa（基本的音階の中で調整できる第 3 度と第 7 度という二つの音）、tāna（六・五音音階を作る方法）、三つの確認ができた。インド音楽の śruti 論（微分音的音楽理論）も伝えられた可能性があることも確認できたが、これらが日本の中世に入ってから使われなくなったのではないかと考えられる。更に前期では、声明・雅楽の音楽理論において重要な調概念、「律・呂」を、古代インドの音楽理論との結びを付け

ることができており、「律・呂」がインドの音楽理論書に現れる grāma 概念から発達した可能性があることが分かった。以上について米国の民族音楽学会「SEM」で発表、京都市立芸術大学の「伝音セミナー」で講義、そして研究紀要『ハルモニア』で発表した。

後期では、「梵讃」の比較的研究の準備として、「梵讃」と同じ系統を持つネパール仏教ののチャチャー修行歌が中心となり、日本、イギリス、ネパールの三つの国においてチャチャーの調査を行い、それらの基本的音階を記録した。チャチャーの曲は五つの源から収集し、それらは①大阪大学の北田信教授の論文等からとった採譜②同研究者の声で唱えられている録音からとったもの（①と②は大阪大学学術情報庫）③ロンドン大学 SOAS の Richard Widdess 名誉教授の論文からとったもの④南アジア音楽研究の先駆者でもあったオランダの Arnold Adriaan Bake（1899-1963）教授が蝋管でとった録音を元に大英図書館がデジタル化したもの⑤本研究者がネパールで伝授されたものである。グループ①と②は、カトマンズ市の Musuṃbāhā 寺院の Narendra Muṇi による口伝を代表、グループ③は、20 世紀のチャチャーの普及活動に励んでいた Ratnakājī Vajrācārya による口伝を代表、グループ④は、Bake 教授のインフォーマントであった Sakalananda Vajrācārya による口伝を代表、グループ⑤は、本研究のインフォーマントである Swayambhu Ratna Shakya の口伝を代表しているのだが、Shakya 氏は以上で記した Ratnakājī Vajrācārya から口伝を受けたものなので、このグループも Ratnakājī Vajrācārya の口伝を代表しているとも言える。基本的音階分析をまとめると、分析した 36 曲の中で 31 曲は 7 音音階を有し、代表する 7 音音階の旋法は、31 曲の中の 8 曲はドリア、11 曲はミクソリディア、6 曲は合成旋法を有するのだが、これらの中で 3 曲がドリア･ミクソリディア（第 3 度が変化)、2 曲はミクソリディア・イオニア（第 7 度が変化）を有するということで、古代インド音楽の基本的 7 音音階の二つ、sa-grāma と ma-grāma が一般的であり（67%)、これらに加えて sādhāraṇa 理論も機能していることが分かった。これによって grāma と sādhāraṇa は、これからの梵讃との比較研究において比較対象の二つとなる。

根本　千聡「院政期における打楽器演奏伝承の考察」

本年度（2022 年度）より着任。院政期以前における雅楽の打楽器（打物）に関する研究を始めた。同時期の打楽器の伝承については、『教訓抄』（1233）巻九、十に載るものが夙に有名であるが、詳しい楽理的な考察はまだされていない。差し当たっては、これまでの研究で調査の手がほとんど及んでいない、打楽器の楽譜・楽書の調査と収集から着手し、研究に使用する資料の拡充を図ることとした。調査の結果、特筆すべき資料を数点見出したので、以下にごく簡単な概要を報告する。

宮内庁書陵部蔵『明暹流羯鼓譜』（函架番号：伏・1530）について。明暹は堀川朝ごろに活躍した人物で、藤原明衡の子。笛譜を編んだことでよく知られている。打楽器においても名が通っており、南都楽人狛行高と並び、院政期打楽器の二大流派の祖に位置づけられていた。本資料は後代の『教訓抄』などと比較するとやや簡潔な内容になっており、12 世紀初頭ごろの羯鼓の演奏伝承を遺している可能性がある。奏法についても本資料独自の記述がいくつかみられるため、本研究上重要な資料となることが見込まれる。奥書には、印春なる人物による貞和四年（1348）の識語があり、それによれば宗禅房頼盛の「秘譜」を書写したものであるという。頼盛は法隆寺の僧で、同寺には頼盛の手になる〈黒漆鼓胴〉が伝わる（重文、東京国立博物館蔵)。打楽器の伝承譜としての信頼性は高いと考えられる。なお､書写の経緯は下記の『新撰要記抄』とも深く相関している。

上野学園大学日本音楽史研究所蔵『新撰要記抄』について。『新撰要記抄』は深観房印円による打楽器の演奏伝承を記した書。印円は興福寺僧聖宣の弟子であり、本書の成立は 13 世紀半ばごろまで下るが、近年の研究によって、聖宣は狛近真が『教訓抄』を編むにあたって多大な協力をしていたことが指摘されている。本書の成立にも聖宣の影響は大きいとみられるた

め、考察の参考になろうと期待される。日本音楽史研究所蔵の本資料は、『明暹流羯鼓譜』と同様、印春が頼盛秘蔵の書を書写したもので、貞和三年（1347）写。同名資料の現存最古写本にあたり、『続群書類従』等に収載される流布本の祖本にあたると目されている。本資料が同研究所に置かれるに至った経緯については調査中である。

宮内庁書陵部蔵『法深本打物譜』（函架番号：伏・1068）について。法深は藤原孝道の嫡男孝時のこと。父孝道と同様、楽の名手として名高い。先述の聖宣は孝道の甥であったと伝わるため、本資料もきわめて近い伝承圏において成立した書であるといえる。なお、本資料は、書陵部の見解によれば鎌倉期写とされる古写本であるが、肝心の楽譜部分の書写精度についてはやや疑問が残る。今後、内容をよく吟味したうえで資料としての位置づけを見極めたい。

以上、本年度の調査資料のうち、特に重要と思われるものについて簡潔に記した。とりわけ、前二者の書写経緯には興味深いものがあり、これにより、鎌倉期ごろの打楽器の演奏伝承について、詳しい系譜が明らかになりつつある。この点については各資料の詳しい解題や本文の翻刻とあわせ、別稿を期して報告したい。本年度の調査結果をふまえ、次年度では、上記のほか数種の楽譜・楽書を比較検討することで、院政期における打楽器の具体的な演奏法を考察する。また、その検討結果を受けた復原試演も計画している。

◆関連する執筆
＊ 2022.9「院政期の箏箑をめぐる説話と秘曲伝承」、『説話文学研究』57、198 ～ 209 頁
◆講義・講座
＊ 2022 年度　日本伝統音楽演習ｅⅠ～Ⅳ 2023.3.9 令和 4 年度後期伝音セミナー「雅楽の鼓動」
◆資料調査
＊上野学園大学日本音楽史研究所、宮内庁書陵部
◆その他
＊ 2022.9　博士（学術）取得（法政大学大学院）

光平　有希「近代日本音楽療法実践の諸相—旧帝国大学における精神医療関連一次史料の分析を中心に—」

報告者はこれまで明治期に創設された公立精神病院、京都癲狂院や東京府巣鴨病院（松沢病院）における音楽療法実践の内容や特徴を個別的に考察してきた。2022 年度はそれらの病院から発展を遂げた日本国内外の旧帝国大学附属精神病院、あるいは大学附属病院内の精神医学講座に焦点を当て、横断的・統合的な比較検討に努めた。当時の音楽療法実践内容は、病院年報や音楽療法実践記録書に記載され、各大学の後身施設を中心に現存しているものの、これまでそれらの史料が研究の対象になることはなく、それ故、近代日本精神医療における東西音楽療法の全体像が明らかにされることはなかった。今年度は、前年度までに収集した京都大学、大阪大学、名古屋大学の資料に加え、九州大学、北海道大学、東北大学に調査の範囲を広げ資料の翻刻ならびに考察に取りくんだ。

また、2022 年４月～６月に京都府立京都学・歴彩館で開催した展示会「明石博高—京都近代化の先駆者—」において企画と運営を担当し、記念シンポジウムでは、明治はじめの京都医療文化の様子や明石博高が創設に奔走した京都癲狂院における音楽療法実践の内容についても言及した。（本企画は、自身が研究代表者を務める科学研究費（若手研究）採択課題「旧帝国大学精神医療にみる近代日本音楽療法実践の諸相」における研究成果発信の一環である。）

◆関連する論文・刊行物
＊ 2022. 12. 12 Yuki Mitsuhira. “Psychotherapy and Music in Twentieth-Century Japan by Shūzō Kure（1916），” in *History of Psychiatry* Vol. 33（3）. California : SAGE Publications. pp. 364-373.
＊ 2023. 1. 16 光平有希「音楽を纏う身体—京都癲狂院と東京府巣鴨病院における音楽療法実践をめぐって」『身体イメージの想像と展開』下巻、安井眞奈美・ローレンス・マルソー編、臨川書店、pp. 139-153.

◆関連する口頭発表・企画展
＊ 2022.4.17.「日本音楽療法史ことはじめ—江戸期～昭和戦前期を中心に—」、兵庫県音楽療法士会 2022 年度研修会、兵庫県福祉センター多目的ホール。

＊ 2022.4.16. ～ 6.5. 展示会「明石博高―京都近代化の先駆者―」、京都府立・京都学歴彩館。（国際日本文化研究センター、神田外語大学、京都府学・歴彩館共催）
＊ 2022.5.21.「市井の医師 明石博高」、「明石博高－京都近代化の先駆者－」開催記念シンポジウム、京都府立・京都学歴彩館大ホール。
＊ 2022. 8.13.「明治後期～大正期の精神医療にみる音楽療法」精神医療史研究会、名古屋国際センター第５会議室。

◆講義
＊ 2022.4. ～ 2023.3. 日本伝統音楽演習 f Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

◆科研費
＊ 2021.4. ～ 2024.3. 研究代表者 , 科学研究費（若手研究）、日本学術振興会、旧帝国大学精神医療にみる近代日本音楽療法実践の諸相。
＊ 2021.4. ～ 2025.3. 研究分担者（研究代表者：鈴木晃仁）、科学研究費（基盤研究 A）、日本学術振興会、20 世紀日本の医療・社会・記録－医療アーカイブズから立ち上がる近代的患者像の探求。

上野　正章

①近代日本における古典音楽の独学についての比較研究――雅楽と謡曲を中心に
②日本伝統音楽研究センターにおけるプロジェクト研究及び共同研究への参加
1．滋賀県湖東平野中部における雅楽の調査

参加研究会「様式分化をとげた雅楽を対象とする伝承実態調査」の一環で、田鍬准教授と滋賀県湖東平野中部の野洲市及び守山市において民間に伝承されている雅楽を撮影･録音し、聴き取り調査を行った。a. 神社に関して、御上神社（野洲市）の例祭及び秋季古例祭（ずいき祭）並びに新川神社（野洲市）の新嘗祭を調査し、奉仕の伶人会及び小篠原楽人の代表者の方に聴き取り調査を行った。加えて、滋賀県立図書館において小篠原楽人および新川神社関連資料を調査した。b. 寺院に関して、赤野井西別院（守山市）の報恩講及び錦織寺（野洲市）の春季讃仏会法要を調査し、奉仕の均調社及び講明社に聴き取り調査を行い、加えて滋賀県立図書館において赤野井西別院関連資料（『赤野井門徒と三宅組坊主衆 平等の慈悲の譜（赤野井別院崇教下村々の文化）』など）を調査した。c. その他、均調社の地域文化活動として行われた大庄屋諏訪家屋敷（守山市）で開催された雅楽の演奏会を調査した。

録音・録画資料の書き起こしはほぼ完了した一方、整理・分析を完了していないために断定することは出来ないが、何れの演奏団体も記録・口伝が残っているのは明治以降であり、近代における雅楽の再編の枠組みで普及を議論することができると予想している。

2．うたひ鏡の翻刻

参加研究会「能の音曲伝書の実践的な解釈―謡鏡を読む」において翻刻･現代語訳を行っている。「第十七ながく云間敷字之事」を翻刻し、現代語訳を試み、解説を執筆した。また、過去に研究会で現代語訳を試みた「第二声之つかひやうの事」および「第六乱曲之論」を翻刻し、現代語訳を改訂し、解説を執筆した。

3．近代日本における古典音楽の独学についての比較研究

謡曲の独習の隆盛が明治以降の出版やレコード・ラジオを通じて醸成された謡曲の学習環境によって生み出されたと考えるならば、近代以前の謡曲の稽古において独習はどのように位置づけられていたのだろうかという問いから研究を進めていった。謡曲雑誌（『能楽』）や実践談・芸談（『謡曲家の実験談』等）を調査し――多いとは言えないが――事例を分析して判明したのは、直シを通じた独習の阻止である。なにも記されていない版本を頼りに一人で新しい番組を謡うことはできず、また、ほとんどの直シは精緻さを欠くので、直シの入った他人の謡本を借りて節を十分に学ぶこともできない。ただし、幾つかの実践例が示すように、早めに稽古に出かけて他人の学習を聴くなどの試みは特に禁止されていないので、予習が禁止されているというわけでもない。直シの研究は糸口を見出すことが出来ず、なかなかデータも集まらず、十分な研究成果を出すことができなかった。

◆関連する調査
＊ 2022.5.5 松尾寺仏舞練習日オンライン参加
＊ 2022.5.12 滋賀県立図書館資料調査
＊ 2022.5.15 伶人会調査（野洲市 御上神社春季大祭）
＊ 2022.6.26 均調社調査（守山市赤野井町 大庄屋諏訪家屋敷半夏生鑑賞会コンサート）
＊ 2022.6.30 伶人会調査（野洲市 御上神社夏越大祓式）
＊ 2022.7.16-17「伶士」調査（遠州森町 山名神社天王祭）・雅楽の方の調査（藤枝市 六所神社祇園祭）オンライン参加
＊ 2022.10.10 伶人会調査（野洲市 御上神社秋季古例祭（ずいき祭））
＊ 2022.11.16 均調社調査（守山市赤野井町 西別院報恩講）
＊ 2022.11.23 小篠原楽人調査（野洲市 新川神社新嘗祭）
＊ 2022.12.10-11 香宝寺雅楽会調査（湯梨浜町 香宝寺報恩講）オンライン参加
＊ 2022.12.18 均調社調査（練習日、於守山市赤野井町 大庄屋諏訪家屋敷）
＊ 2023.1.11 中主町雅楽会（井口雅楽会＋八夫雅楽会）聞き取り調査（野洲市役所 2 階）
＊ 2023.1.28 滋賀県立図書館資料調査
＊ 2023.3.18 講明社調査（野洲市錦織寺彼岸初日法要）
＊ 2023.3.21 講明社調査（野洲市錦織寺彼岸中日法要）
＊ 2023.3.24 講明社調査（野洲市錦織寺彼岸結願法要）

遠藤　美奈「女性と英語による仏教音楽（讃佛歌）の研究」

本年度は、とりわけ初期英語讃仏歌のうち、女性で唯一讃仏歌の作詞に関り、こんにちの作品集に名を残すドロシー･ハント（Dorothy Hunt/1886-1983）とハワイ別院（本派本願寺）との関係性等について資料調査並びに現地調査を行なった。

ドロシーは、1926 年にハワイ別院の 2 代目英語伝導部長となったアーネスト･ハント（Ernest Hunt）の妻で、就任前からアーネストとともにハワイ島ヒロや周辺離島で日系子弟向けの日曜学校をともに支えていたとされている。アーネストは、初代英語伝導部長の M.T. カービーとともに英語による礼拝や説法を各教会で行ったほか、1924 年にはハワイで最初で最後となる得度式が行われ、法名を授かり、ハワイのその後の英語伝導に不可欠な役割を担った。その一方で注目すべきは、その得度式でドロシーもまた、同様に法名眞光（Shinko・Shinkoh）を授かっていたことである。その背景については、いくつかの可能性は見えたが、現在のところ未だ十分な結論には至ってない。ドロシーの英語讃仏歌の作詞に対する貢献が高いだけではなく、当時の開教師の妻らが附設教育施設での子弟教育や留学制度を整えていたことをふまえると、今村清子（今村恵猛の妻）や非日系人の支援者らの動向との接点を、さらに深く掘り下げなければならないことがわかってきた。ドロシーは、英国領事館の秘書として働いていたとされる一方で、1930 年代にハワイで学校を開設している。最初はオアフ島内に 1 箇所だけだったが、晩年までには同島内に 3 箇所も学校を構えた。

一方で、現地調査では、曹洞宗ハワイ別院正法寺の駒形宗彦老師を介してドロシーの孫を探し出し、祖母に関するいくつかの記憶を聞くことができた。音楽的な側面については、彼女のみた晩年の様子からは、ドロシーに音楽的な素養はなかったようにみえ、「作曲することはもちろん、どのような楽器も演奏することができなかっただろう」と話してくれた。また、文学的な素養についても、「どこかで学んだことはおそらくないだろう」と話す一方で、ドロシーが極めて心が優しくおおらかでそれを文字にする能力に極めて長けていたことを記憶している。詩はライフサイクルの中の一つだったようで、ドロシーが書き残した詩は彼女の自宅に現在も保管されている。

ドロシーをはじめ、移民先であるハワイの開教師を支えた女性（坊守、寺族など呼称は宗派等による）らは、こんにちでも表立った記録で紹介されることはほとんどない。国内外で活動してきた仏教婦人会の動向もふまえ、本事例については、論文「戦前期のハワイ本派本願寺の英語による仕事を支えた女性たち（仮）」として発表する予定である。

なお、本研究は基盤研究（C）「越境する日本の仏教音楽　宗教・文化・精神のグローバル化」（研究代表 GILLAN Matthew :19K00160）の研究分担によるものである。

◆関連する執筆
＊ 2022 年 12 月　曲目解説「メロディーの宝石箱《雪の山路》」『めぐみ』260 号、28-29 頁。
◆関連する口頭発表
＊ 2023 年 3 月 Roundtable “Music and Sound in Japanese Religions” Association for Asian Studies Annual Conference 2023（Boston）
＊ 2023 年 1 月 Conference “Women in Japanese Buddhism” Tübingen University（Tübingen）

大西　秀紀「近代日本音楽の音声資料に関する研究」

当該年度はまず科研費助成研究「内外・タイヘイレコードのディスコグラフィ作成」に関する研究業務を遂行したが、それとは別に、年末に歌舞伎学会秋季大会において、「三光堂メノホンの歌舞伎レコード」というタイトルで発表を行った。メノホンは東京の蓄音機・レコード商の三光堂が明治末に立ち上げた自社制作レコードのレーベルだが、そこに上方役者の二代目中村梅玉と四代目中村福助が計 5 枚の録音を遺している。歌舞伎の SP レコードは約 600 枚が確認されるが、メノホンのこの 5 枚は国産初の歌舞伎レコードであり、さらに重要なのは二代目梅玉が生涯に遺した

録音がこの内の「実盛物語」「日蓮記」の２枚のみであるということである。メノホンのレコードは基本的に残存数が少なく、歌舞伎に至っては、これまで東京文化財研究所に四代目福助「紙治こたつ おさん／菅原車曳 桜丸」が確認されるのみだった。今回梅玉の「実盛物語」を中心に、福助「恋の三位」「濡衣」の計３枚を紹介できた意義は大きいと考える。

◆関連した執筆
＊ 2022.12 「桂家残月とレコード吹込」『大阪府立上方演芸資料館 令和３年度年報』大阪府立上方演芸資料館
＊ 2023.3 「京都のレコード会社 東洋蓄音器（オリエントレコード）について」『アート・リサーチセンター Vol.23』立命館大学アート・リサーチセンター
◆関連した講演・発表
＊ 2022.8 「映画館で流れた音」『ボン大学片岡コレクション研究会 第８回定期講演会』（オンライン）
＊ 2022.12 「三光堂メノホンの歌舞伎レコード」『歌舞伎学会秋季大会』（オンライン）
＊ 2022.12 「うかれ節・浪花節・浪曲」『伝統的大衆芸能の世界』、たかつき市民カレッジ（対面）
＊ 2023.2 「五代目笑福亭松鶴の天王寺詣り」、大阪府立上方演芸資料館（対面）

神津　武男「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」

本年度の日本伝統音楽研究センターでの活動は、二件の研究費によって、次の二つの課題に取り組んだ。

第一に筆者が研究代表者として2020年度以来、科学研究費補助金･基盤研究（C）、研究課題名「人形浄瑠璃文楽の近世期上演記録データベース更新に係る新出資料調査と公開運用の研究」の採択を得ており、本年2022年度を最終年度とする。江戸時代・近世期の「人形浄瑠璃文楽」（義太夫節成立以後の人形芝居）の、真に科学的な通史の完成を目指して、資料整備を進めている。筆者は「浄瑠璃本」（通し本。演劇台本・脚本に相当）、「番付」（ポスター・チラシに相当）の二種の史料について、日本国内および海外で悉皆調査を展開してきた。近年新たに所在を把握した未調査機関を中心に実地踏査して、「浄瑠璃本」「番付」各データベースの充実と精度の向上を目指す。新型コロナウイルス感染症「COVID-19」の流行のため初年度以来計画の大幅な変更を余儀なくされたが、次に掲げる機関について資料調査を進めた。〈1〉浄瑠璃本（神奈川県立公文書館・京田辺市市史編纂室・慶應義塾大学斯道文庫・国立劇場・中泊町博物館・野田市立興風図書館）、〈2〉浄瑠璃番付（関西大学図書館・京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・福岡市博物館）。

第二に筆者が研究分担者として参画するところの、科研費･基盤研究（B）、研究課題名「新出コレクション「西村公一文庫」の目録作成と江戸時代の日本伝統音楽の資料学的研究」（研究代表者は竹内有一氏）が2020年度に採択された。2023年度までを期間とする。「西村公一文庫」は、西村公一氏（大阪府豊中市）が収集した日本伝統音楽に関する新出コレクションである。事前の調査では同文庫は四千点を超えると見積もられ、京都・大阪を中心とする文化圏における日本伝統音楽の資料群としては、随一の点数を誇るコレクションである。当該研究課題は、その目録化を第一歩として同文庫を学界へ紹介し、同文庫の全貌を総合的に分析し、日本伝統音楽の資料学的研究に資することを目指す。筆者は浄瑠璃本の整理を担当し、通し本について詳細な書誌調査を行なった。西村氏の収集はいまも継続中で、2017年度末の時点では527点と数えた（科学研究費補助金･研究活動スタート支援、研究課題名「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」16H07120研究成果報告書）が、2022年度までに寄託された分は、683点と数えるに至った。

研究成果の社会還元のひとつとして初年度以来の懸案となっていた【西村公一文庫紹介展】をオンラインと併催する形で、実現まで漕ぎ着けた。2022年5月に始まった早稲田大学演劇博物館の展示「近松半二　奇才の浄瑠璃作者」は、1998年発表の拙稿「「近松半二」署名作品一覧」（岩波講座『歌舞伎･文楽』第九巻「黄金時代の浄瑠璃とその後」、岩波書店、一九九八年所収）で数えた61作品を襲用したものであるが、筆者の最新の調査では浄瑠璃本62作品と数えている。演博図録にはタイトルの誤読や誤った解説もあり、早期に修正すべきだと考えるので、最初の

テーマとして「近松半二の浄瑠璃本」を取り上げることを提案し、日本伝統音楽研究センターの展示スペースで開催するに至った。62作品を三期にわけて、2022年11月—12月に第一期、2023年1月—3月に第二期を開催した（第三期は次年度2023年4月—5月に第三期を開催予定）。ひとりの作者の大半の作品を西村公一文庫本で辿ることが出来るという点に、西村文庫の充実ぶりを端的に理解いただけるものと考える。

浄瑠璃本や番付の所在調査の波及的な成果として、江戸の浄瑠璃本板元の大坂屋秀八の外題目録『両竹鑑』の諸本について紹介した。外題目録とは、浄瑠璃本の内、抜き本（いわゆる稽古本）の出板目録をいう。長友千代治氏著『近世・上方／浄瑠璃本出版の研究』が外題目録の諸本を網羅するが、本書『両竹鑑』はその紹介に洩れていた。江戸で刊行された外題目録としては最初の存在であり、かつ作品名をイロハ順に排列する検索方法を最初に備えた独創的な一本であることを指摘した。また大坂屋秀八の住所の移転時期について考証した。

◆関連する執筆

＊（1）「江戸の浄瑠璃本板元・大坂屋秀八と外題目録『両竹鑑』について」（『歴史の里』第26号、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館、2023年3月所収）。

薗田　郁「浪花節芝居の生成と展開に関する研究」

本年度は上記の研究課題に基づき、主に浪花節芝居（節劇）の興行活動に関する調査を文献資料および聞き取り調査により進めた。これまでの研究で都市部における浪花節興行の実態を「近代歌舞伎年表」などの基礎資料において進めてきたが、それらの成果を整理しつつ、上記の資料に含まれない地域での調査として九州地域、とりわけ福岡、長崎において資料調査を行った。当該地域で発行された新聞資料に基づき、浪花節芝居の興行記録の調査を行い、浪花節芝居の興行記事に関する多くの情報を得た。その興行記録に関する分析、考察については今後進めていく予定であるが、さしあたり見出せたのは、浪花節芝居の興行が複数の芝居小屋で常時行われていたこと、またそれは福岡と長崎いずれにも見いだせたこと、さらに浪花節芝居の一座は東京や大阪といった都市部で活動していた一座が行うものではなく、九州地域で活動しているものであることも窺えた。未調査の期間や地域についても今後できる限り見ていきたいと考えているが、九州地域の浪花節芝居に関する興行記録はたとえば嘉穂劇場や八千代劇場といった個別の興行資料を通じて、その一部は明らかにされており、これらの個別の座の記録を踏まえながら、より広い領域での記録を結び付け、重ね合わせることで、当時の浪花節芝居の興行実態の全体がよりはっきりと見出せると思われる。上記調査のうち「近代歌舞伎年表」における主要都市部（大阪、京都、名古屋）の興行状況の調査（明治期から昭和初期）については、総合的な分析・考察を行い、その成果の一部を比較日本文化研究会において口頭報告した。また上記の調査と口頭報告から得られたフィードバックを元に、節劇の関する論文を執筆した（投稿済審査中）。

その他では浪花節芝居と関連する調査として大阪の南河内周辺で俄や河内音頭に関する聞き取り調査を行った。今回の聞き取り調査ではだんじり祭りにむけた稽古のための演技指導として大阪市内より専業の演者が関わり、そのなかに浪曲師も含まれるといった情報も得られた。これらの聞き取りについてはこれから実施予定の部分も含まれており、継続して行うことで、より具体的な状況が浮かび上がってくると思われる。今後は上記の地域での調査を進めながら、節劇史の都市部から地方への移行なども踏まえ、浪花節芝居の盛衰について研究を進めたいと考えている。

◆関連する執筆

＊ 2022.9「源氏節女芝居の流行における身ぶりと語り」『日本伝統音楽研究』第19号、日本伝統音楽研究センター、pp.1-13。

◆関連する口頭発表

＊ 2022.11.5「節劇にみる大衆芸能の地域受容」比較日本文化研究会2022年度研究大会「近代における大衆芸能の地域受容」、オンライン開催。

◆調査

＊ 2022.6.25 福岡県立図書館にて浪花節芝居に関する資料調査

＊ 2023.3.10-3.12 長崎県立長崎図書館にて浪花節芝居に関

する資料調査
＊ 2022.5.26 大阪府富田林市にて俄に関する聞き取り調査
◆対外活動
＊ 2022.04-2023.03 大阪音楽大学　非常勤助手
＊ 2022.04-2023.03 大阪大学大学院文学研究科 特任研究員
＊ 2021.09-2022.03 畿央大学　非常勤講師
＊ 2021.09-2022.03 大阪教育大学　非常勤講師

高橋　葉子「室町末期の謡における声調論と技法の研究」

1．科研費研究「謡伝書用語の体系的研究―演奏の理念と表現を中心に」

前年度から調査をしている「永正元年観世道見在判伝書」（以下「道見伝書」）の全体的な解題と素翻刻を終え、同書の呂律論を中心に、東洋音楽学会第 73 回大会（2022 年 11 月）において発表を行った。またこの発表を改訂補足し、本紀要に論文を発表した。「道見伝書」では世阿弥の呂律論とは逆に、呂を愁い（亡臆）の声、律を祝言の声と配当し、呂の声を謡の基本としている。現存する謡伝書には類を見ない説だが、概念的な世阿弥の呂律論に対し実践的な説得力がある。同書によれば呂の声とは、人間的な心情を表す亡臆の声調であると同時に、ふし（曲）を謡う声とされ、微細なふし扱いに応用される技巧的な声ともされている。拙稿では、こうした技巧的表現の追及が曲線的な歌唱法を発展させ、ツヨ吟の特徴である音階構造と旋律からの逸脱に結果したと推論した。報告者は先に、非風を是とする闌曲謡を謡の最高位とする思想がツヨ吟の母体となった可能性を論じたが（2022.3 能楽学会口頭発表、2022.12「闌曲が能にもたらしたもの」『能と狂言』）、闌曲を謡う声がまさに呂の声である。そうであれば、さらに祝言とは何か、それを表現する祝言の音楽とはどのようなものかを明らかにする必要があるだろう。能の造形全体に関わる祝言・亡臆の概念と、それを実践する声の理論（声調論）と技法について、現在の祝言・亡臆を含めて多角的に研究を続けたい。

「道見伝書」は金春・観世両系統の複数の伝書類を集成した書で成立年代は不詳だが、室町末期以降の謡伝書に多大な影響を及ぼした『塵芥抄』（天正 11 年以前成立）の影響はみられない。分量的に過半を占める「音曲十五之大事」など、古色の認められる重要な記事の解読を残しており、次項に述べる「謡鏡」とも関係が深いことから、科研費研究を一年延長し引き続きこの伝書の解読を試みることとした。全文の翻刻は次年度に伝音アーカイブスにて公開する予定である。

なお本研究の関連研究として、神戸女子大学古典芸能研究センター謡伝書研究会（代表者樹下文隆）において『塵芥抄』の翻刻を共同で行った。『塵芥抄』は室町末期の謡の構成音を記す重要文献だが、ふしの分類と命名が進んでいる点においても技法研究の貴重な資料である。同研究会で引き続き研究を進めたい。同じく関連研究として、江戸末期筆の太鼓伝書に基づき、室町期の囃子方の作調意欲を伝える太鼓による〈定家〉〈芭蕉〉の伝承を武蔵野大学能楽資料センター紀要に紹介した。

2．プロジェクト研究「音曲技法書（伝書）の総合的研究」（代表藤田隆則）

継続中のプロジェクト研究「音曲技法書（伝書）の総合的研究」（代表藤田隆則）では、謡伝書『謡鏡』の輪読研究を行っている。報告者は「道見伝書」と重なる所のある「論義の事」の読解を吉岡倫裕氏と共同で行った。『謡鏡』は「道見伝書」に依拠した部分が多く、ここでも呂の声の応用が述べられている。但し全体としては独自の説を展開する個性的な伝書である。科研費研究と連携させながら取り組んでゆきたい。

◆関連する執筆
＊ 2022.12「闌曲が能にもたらしたもの」『能と狂言』20 号、能楽学会
＊ 2023.03「〈定家〉〈芭蕉〉の太鼓秘説―金春流太鼓橋本市左衛門の伝書より」
＊『武蔵野大学能楽資料センター紀要』第 34 号
◆資料翻刻（共著）
＊ 2022.06「『塵芥抄』を読む　早稲田大学演劇博物館本と京都観世会浅野文庫本（弥石源太夫識語本）翻刻」謡伝書研究会、『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』第 16 号
◆口頭発表
＊ 2022.11「謡伝書「永正元年観世道見在判伝書」の音曲論」東洋音楽学会第 73 回大会
◆講座・講座記録
＊ 2022.09 武蔵野大学能楽資料センター特別講座「人間国

宝が語る能楽人生［囃子方の巻］三島元太郎・大倉源次郎」（金子健氏と共同担当）
＊ 2023.03 武蔵野大学能楽資料センター特別講座「人間国宝が語る能楽人生［囃子方の巻］三島元太郎・大倉源次郎」『武蔵野大学能楽資料センター紀要』第 34 号
◆助成事業に基づく研究
＊科学研究費助成事業基盤研究（C）20K00131 研究課題「謡伝書用語の体系的研究―演奏の理念と表現を中心に」（研究代表者）

多田　純一「近代日本における西洋音楽受容と演奏様式および形態に関する研究」

研究概要

本研究は科学研究費「ショパン作品の演奏におけるヴァリアントの選択と即興的表現の研究」（20K00244）を基盤としつつ、近代日本における西洋音楽受容を考察するために、明治期から昭和初期におけるショパンの作品の演奏、ショパンの作品を積極的に演奏したピアニストの音楽活動、日本に現存するショパンの手稿譜についても調査対象としている。

2022 年度は当該科学研究費の最終年度にあたり、第 18 回ショパン国際ピアノ・コンクール 18th International Fryderyk Chopin Piano Competition の入賞者全員が出場した第 18 回ショパンと彼のヨーロッパ国際音楽祭 18th International Chopin and His Europe Festival の現地調査を実施した。コンクールでは演奏に対して即興演奏が含まれることはなかったが、コンクールの翌年に実施された音楽祭において、マルティン・ガルシア・ガルシアが繰り返し部分における装飾音の付加など、即興的な表現を加えた。また、5 名のショパン・コンクール入賞者にインタビューを実施したところ、3 名がショパン存命の時代に行われていた演奏習慣である即興的な演奏表現を今後の演奏に加えることに前向きであると回答した。これらのことから、今後のショパン作品の演奏表現が変化していくと予想される。

近代日本における西洋音楽受容の観点では、ポーランド国立フリデリク・ショパン研究所が発行するジャーナル「ショパン・レビュー」*The Chopin Review* の第 4-5 合併号において、東アジアにおけるショパン受容がテーマとなった。中国、韓国、日本のショパン受容についてそれぞれの研究者が担当するという形式となり、多田は「日本におけるショパン：音楽取調掛から『ピアノの森』へ」‘Chopin in Japan: From *Ongaku Torishirabe Gakari* to *Forest of Piano*’ というタイトルの論文を執筆した。このジャーナルは 2023 年 3 月に冊子としての発行およびウェブ掲載された。

また、明治期から昭和初期にかけて活躍し、日本人として最初に「ショパン弾き」と呼ばれた澤田柳吉が取り組んだ「調和楽」にも焦点をあて、彼が作製し、現存するピアノ・ロールのうち、状態のよいロールをレコーディングした。学習院アーカイブズ所蔵《調和勧進帳》、《蝶々》、中森隆利氏個人蔵《花は色色》、《書生節》、《娘道成寺毬唄》、《大津絵》、《住吉》、佐々木幸弥氏個人蔵《娘道成寺（下巻）》、多田個人蔵《雪は巴》、《蛍の光ヴァリエーション》の計 10 作品である。澤田は最初に楽譜として「調和楽」を出版し、続いて SP レコード録音、そしてピアノ・ロールの作製というように、「調和楽」を発展させていた。この録音は、次年度において、SP レコードの復刻版と共に 2 枚組 CD として出版する予定である。

◆著作活動
＊ 2022.08 共著論文「第 18 回ショパン国際ピアノ・コンクールにおける演奏者のヴァリアントの選択ー《バラード》全 4 曲を例としてー」『つくば国際短期大学紀要』第 48 輯、pp.29 ～ 60（2022 年 8 月 10 日）（科学研究費「ショパン作品の演奏におけるヴァリアントの選択と即興的表現の研究」の研究協力者である岡部玲子、武田幸子との共著）
＊ 2022.11 単著雑誌記事「ワルシャワ熱狂の夏！「ショパンと彼のヨーロッパ」国際音楽祭」『ショパン』11 月号、ハンナ、pp.48 ～ 49（2022 年 11 月 1 日）
＊ 2023.02 雑誌取材記事「インタビュー・横山幸雄」『ムジカノーヴァ』2022 年 2 月号、音楽之友社、pp. 28 ～ 29（2023 年 2 月 1 日）
＊ 2023.02 雑誌取材記事「アーティスツ・ラウンジ・及川浩治」『音楽の友』2022 年 2 月号、音楽之友社、p.121（2023 年 2 月 1 日）
＊ 2023.03 単著論文 ‘Chopin in Japan: From *Ongaku Torishirabe Gakari* to *Forest of Piano*’ , *The Chopin Review*, Issue 4-5, Narodowy Instytut Fryderyka Chopina, 118-153.（2023 年 3 月）

◆口述活動
＊ 2022.08 04　ラジオ講座、LIVE 配信およびストリーミング OTTAVA Accademia「ショパンとその楽譜」＃１（全３回）「ショパンの死後に出版された楽譜の歴史」（パーソナリティ：長井進之介）
＊ 2022.09 08　ラジオ講座、LIVE 配信およびストリーミング OTTAVA Accademia「ショパンとその楽譜」＃２（全３回）「ショパンの様々な原典版比較」（パーソナリティ：長井進之介）
＊ 2022.10 13　ラジオ講座、LIVE 配信およびストリーミング OTTAVA Accademia「ショパンとその楽譜」＃３（全３回）「ショパンをもっと知る－文献紹介およびショパン受容について」
◆調査・取材活動
＊近代日本における西洋音楽受容と演奏様式および形態に関する研究
＊第 18 回ショパンと彼のヨーロッパ国際音楽祭現地調査（2022 年 8 月 13 日～ 31 日）
＊所属学会　日本音楽学会、日本音楽表現学会、日本音楽教育学会、音楽教育史学会

出口　実紀「『龍笛要録譜』の研究」

本研究は科学研究費補助金·基盤研究（C）「龍笛要録譜の研究」に基づくもので、中世に成立した『龍笛要録譜』を含む大神家の笛譜の伝本整理と分析をおこない、笛譜の記譜の変遷を明らかにするものである。今年度は複写入手した『龍笛要録譜』の伝本の内容を整理し、その過程で一部の伝本には書写者による書付を確認し、三方楽所の楽人が大神家の笛譜をどのように享受していたかを知る貴重な手掛かりを得た。今年度後半は産休により研究を実施することが出来なかったため、予定していた大神家の『懐中譜』、『基政笛譜』といった他の笛譜の伝本調査および内容分析については次年度以降に実施する。

また、委託研究として携わった当センター所蔵「雅楽管楽器製作技術」保持者の故山田全一氏の楽器製作用具 813 点については、調査および目録作成を経て、京都市文化財保護審議会での京都市有形民俗文化財への答申がなされた。

民俗芸能における研究活動では和歌山県の『御坊祭総合調査報告書』が刊行され、御坊祭における獅子舞の音楽分析と日高地方の獅子舞の音楽について執筆した。御坊祭では九組の氏子組から獅子舞が奉納されるが、獅子の芸態と笛の旋律パターンの分析をおこなったところ、近代以前からの氏子組においては同じ（または類似する）笛の旋律構成をもつことが明らかとなり、使用される音型やリズム等、御坊祭の音楽的特徴として位置づけることができた。

◆関連する執筆
＊ 2022.3『御坊祭総合調査報告書』御坊市教育委員会編、第四章第二節「四 獅子舞」（pp.140-146）、第六章第四節「日高地域にみる獅子舞の音楽」（pp.288-291）を執筆。
＊ 2022.8 書評「磯水絵編 『興福寺に鳴り響いた音楽―教訓抄の世界―（二松学舎大学学術叢書）』」『東洋音楽研究』第 87 号、東洋音楽学会編、pp.84-88。
＊ 2022.9「天王寺方楽譜にみる記譜の一考察」日本伝統音楽研究センター紀要『日本伝統音楽研究』第 19 号、pp.33-43。
◆関連する研究助成
＊日本学術振興会科学研究費助成事業　基盤研究（C）「『龍笛要録譜』の研究」（2021 年 4 月～ 2026 年 3 月予定）
＊一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団研究助成「地方における雅楽の伝播と系統に関する研究―飛騨・西濃地方を中心として」（2021 年 4 月～ 2023 年 3 月）

丹羽　幸江「室町期の謡の旋律法の研究と能の復曲活動」

1、「創生期の能の音楽における歌詞の伝達に適した旋律法」の研究

2018 年度より開始した研究課題「創生期の能の音楽における歌詞の伝達に適した旋律法」（科学研究費基盤 C、2018 ～ 2022 年度）の最終年度となった。コロナ禍により依然として資料の収集には困難も多く、また古い謡を伝承する奈良県の謡の実態調査は 2019 年度に着手したものの中断しており、2023 年 3 月になってようやく第 2 回の調査が再開したような状況で、研究の進展は困難を極めた。そこでこれまでの研究で明らかになった結果を実際の復曲活動において謡本の記号に当てはめて検証する作業に取り組んだ（→論文「能楽《不逢森》の節付け面での復曲」）。

2、能の復曲活動

現在演じられなくなった能を復活することを復曲

という。観世流梅若研能会の能楽師加藤眞悟氏とともに復曲活動を行い、令和４年度には《大磯》と《不逢森》の二曲が復曲上演された。音楽面担当として室町末期および江戸期の謡本をもとに節付けの復元を行い、その際には上記１での研究成果の検証を行った。

2022年11月にはまず《不逢森（あわでのもり）》という室町末期に作られ、現在は廃絶した曲の復曲上演が名古屋能楽堂で行われた。江戸中期に刊行された貞享三年九月林和泉掾刊五番綴謡本、通称三百番本を中心として、室町末期の写本である東京大学史料編纂所所蔵天文二十四年観世元忠奥書謡本やおなじく室町末期の天理図書館蔵室町末期筆観世流謡本（百七十二番）と比較対照しながら解読し、旋律とリズムを現在のものに直すという作業に携わった。また2023年２月の《大磯》の復曲上演に際しても、同様の作業を行った。

◆関連する執筆
＊2023.6（予定）　論文　丹羽幸江「能楽《不逢森》の節付け面での復曲」　京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要、第20号、印刷中
＊2022.11　著書　不逢森復曲検討会（加藤眞悟、丹羽幸江、伊海孝充）『復曲　不逢森』　檜書店。
＊2023.2　著書　大磯復曲検討会（加藤眞悟、丹羽幸江、伊海孝充）『復曲　大磯』　檜書店。
◆関連する口頭発表
＊2023.2　講演「大磯の音楽的な復曲作業」第九回湘南ひらつか能狂言、於ひらしん平塚文化芸術ホール

平間　充子「日本古代の儀礼音楽に関する研究」

日本学術振興会科学研究補助金（研究成果公開促進費・学術図書）の助成を受け、単著『古代日本の儀礼と音楽・芸能 - 場の論理から奏楽の脈絡を読む - 』の加筆・校正作業を中心に行った。その内容は、十世紀半ば以前を中心に、日本古代の記録類に見られる芸能奏上の記事を分析し、場の論理が奏楽とどのように結びついているのかについて検証するものである。使用した主な資料は、六国史、官撰儀式書『内裏儀式』『内裏式』『儀式』（９世紀成立）、私撰儀式書『西宮記』『北山抄』『江家次第』（10～12世紀成立）、楽書『教訓抄』『続教訓鈔』、中国側の資料としては正史から主に礼楽志・音楽志などである。日本古代の場合、記録の持つ性格上記された奏楽の場は国家的儀礼が中心となっている。そのため、それぞれの儀礼が本来担っていた意義とその展開過程、同時に当時の政治的・社会的状況が儀礼の場の論理にどのように反映されているのかを示しつつ、奏楽の実態に鑑み奏楽の持つ脈絡を探るといった方法をとるに至った。したがって、日本音楽史・中国音楽史のみならず日中の古代史、とりわけ儀礼研究の成果に依るところも大きい。

具体的に取り上げた儀礼は、葬送儀礼、所謂踏歌節会とその前身となる正月中旬の饗宴儀礼、相撲儀礼、五月五日節、旬儀とその淵源たる饗宴、正月に行われる二宮大饗・大臣大饗、御斎会、列見と定考それぞれの穏座、内宴と菊花宴、男踏歌、賀茂臨時祭、石清水臨時祭、春日祭である。その結果、平安初期以前の儀礼における音楽や芸能は、律令制を中心とした主として中国からの制度の導入、それに伴う儀礼整備の一環として位置づけられること、一方で大陸の諸制度や音楽を単に模倣したのではなく、日本独自の慣例との整合性も意識されていたことを指摘した。加えて、とりわけ９世紀以降、その儀礼の場で表象・確認される君臣関係に基き、雅楽寮・近衛府・内教坊といったそれに相応する奏楽機関や集団が音楽・芸能を奉じていたことを明らかにした。

これらの成果を敷衍し、来年度以降は宮廷を中心とした女性演奏家の問題に焦点を当てて日中比較を行う予定である。

◆関連する執筆
＊2023.2　『古代日本の儀礼と音楽・芸能 - 場の論理から奏楽の脈絡を読む - 』、勉誠出版
◆関連する口頭発表
＊ 2022.5　“Court Music and Dance as a Ruling Mechanism for the Maintenance of Social Order: A Comparative Study of Ancient Japan and China”, ICTM 7th Symposium of the Study Group on Musics of East Asia, Zoom
＊2022.10　「雅楽の世界」（一社）大学女性協会主催第13回Ｊカフェ、Zoom
＊2023.2　「日本古代における雅楽寮・近衛府の奏楽と朝廷内の秩序―儀礼研究の視点から―」当センター「儒教と文人の世界観に展開する「楽」思想の諸相研究」研究会、Zoom

福本　康之「聲明および賛美歌との関係から見る近現代日本仏教界における洋楽受容の実態」

【2022 年度進捗】

筆者の研究は、これまで仏教洋楽そのものに焦点を当ててきた。しかし本研究では、関連領域である聲明や賛美歌といった、異なるジャンルの宗教音楽との関係から、仏教洋楽の受容について読み解くことを目的としている。

2 年目に当たる本年は、昨年度に続き、洋楽の受容が盛んである浄土系教団（浄土宗および真宗十派）の声明側の資料（声明集および『中外日報』などの宗教専門誌）の調査・収集を中心に行った。昨年度、それらの資料から、仏教界で洋楽受容がはじまった近代以降に、伝統的な聲明についても比較的大きな改譜および新譜の創作が行われてきたことが明らかとなったことに鑑み、今年度は、浄土真宗の声明において核となる（日常の勤行や法要での依用頻度が高い）もののひとつである「正信念仏偈」（親鸞著『顕浄土真実教行証文類』行巻末の偈文）を中心に、明治以降の改譜状況について調査した（本年度は、本願寺派、興正派、大谷派、誠照寺派を対象とした。次年度は、前述以外の真宗十派および東本願寺派を対象とする予定である）。

そのなかで、正信念仏偈に関しては、洋楽によるあるいは洋楽を念頭においたと考えられる譜も確認された。これらは主に「音楽法要」などの名称で呼ばれており、正信念仏偈以外を中心とするのものに関しても、音楽法要と称されるものが新たに制定されているので、そうした音楽法要という時代の流れのなかで、できたものと推察される。

そしてその内容は、まさに洋楽そのもののスタイルに依るものから、音楽法要と呼ばれながらも非常に伝統的な声明に近いものまで様々であり、この辺りから、伝統的な声明と洋楽の相互の影響関係についても明らかにできるのではないかと考える。

もう一点、賛美歌と仏教洋楽の関連についても、前年度に引き続き、相互影響的な内容を時代を追って読み解くための資料について調査を続けているが、こちらは困難を極めている。それは、明治時代に入り、信教の自由が認められたとはいえ、明治 30 年代までは、仏教界がキリスト教排斥（いわゆる辟邪運動）を実質的に主導していたことが要因と考えられる。具体的には、洋楽との関係については、もっぱらに明治政府主導の「小学唱歌」との関連で語る言説が多く、賛美歌との関連で積極的な関係を語るものは、常に少ない。この点については、次年度以降の課題としたい。

◆番組制作：企画・構成担当

＊浄土真宗本願寺派『嘉門タツオと聴く仏教の響き』、2022 年 11 月 22 日 17 時、Youtube 本願寺公式チャンネル配信

＊浄土真宗本願寺派『10 代・20 代に贈る雅楽の世界〜仏教の音楽』、2022 年 11 月 23 日 11 時 30 分、Youtube 本願寺公式チャンネル配信